

- (1) 本文引用は『小僧の神様・城の崎にて』（新潮文庫 昭43）を使用している。  
 「隠された物語」については、拙稿「よしもとばなな『キッチン』論―『私』の心に隠された物語」（『総合文化論叢』33号札幌大学2012・3）にもその詳細を示している。
- (2) 「青年期」とは一般的に、児童期と成人期の間位置する、現代日本社会においては10〜30歳ぐらいの若者を指す広い概念としてとらえられているが、本稿では、思春期を経て、他者や社会との関係性の中で「これこそが私だ」と言える「私」を捜し求める「自我同一性の問題」に直面している中高生および大学生の年代を指している。（伊藤美奈子編『思春期・青年期臨床心理学』（朝倉書店2006）を参照）
- (3) 中村光夫は、「暗夜行路」（『志賀直哉論』筑摩書房 昭41 p.106）の中でその屈託を「父との不和」に見ている。
- (4) 宮越勉「志賀直哉―その青春の終焉―」（『文芸研究』明治大学文学部紀要1981）p.99 宮越は「最終部で主人公が置かれた状況は、本多秋五がいうように『新しい視界がひらけたというのではなく、『そこに凝然と佇立している』といえるものである。では主人公の直面する生の現実とは具体的にいかなることか。それは作者志賀に即していうと、その父との不和の関係ということに尽きるだろう。」と指摘している。
- (5) 土井隆義『友たち地獄』（ちくま新書2008）p.16
- (6) 土居健郎『甘え』の構造』（弘文堂1971）
- (7)

「気分」がここでは「心」と名づけられている。

しかしその奥深くにはもう一つ別の「心」があるだろう。つけまつげをつけてたとえ自信がついても、それをはずしてしまえば元の自分である。その「付けるタイプの魔法」を外したところにある「自分」は、本当の意味で「自信を身につけ」コンプレックスを解消し、幸せな気持ちで空を眺めることができるのだろうか。そのような「気分」のさらに深いところにあるもう一つの「心」の存在を見失ってはならない。

「城の崎にて」の語り手も、振り返ってみればこの「気分」に左右されている人物である。物語の最後に至った心境も「自分はそれに対し、感謝しなければ済まぬような気もした」「それ程に差はないような気がした」（傍点筆者）と、あくまでも「気分」として実感したところで、この療養地を去ってしまっている。彼自身、その心の奥にあるはずの感情に迫ることなく、本当の心の奥にある自分の気持ちに働きかけないまま、表面的な「気分」に任せてこの滞在を終えてしまっていることが、何よりの問題かもしれない。彼自身が「心の二重性」に気づくことがなければ、自身が抱える〈心の闇〉に到達することは到底あるまい。

自分が変わるためにまず「心」を変える。言い古された言葉であるが、この「心」には、表面に現れる「気分」とは別のところに、もしかしたら自分も意識しえない〈心〉があるかもしれない。このことに今の時代を生きる若者はどのくらい意識的であるだろう。そもそもこの〈心の二重性〉に気づくことができれば、「人は言葉には表れないところに別の思いを持っている」などという言葉も宙に浮いてしまうだろう。文学作品に「隠された物語」を見つける授業は、そのような意味において青年期にある若者のアイデンティティをどう育てるかという問題に、また別の形で迫る問題を提起しているように感じている。

いくらでもあったはずである。それをしなかったことについての反省もしなければならぬ。しかしながらそのような反省をふまえてなお、もう一点考察しておきたいことがある。

いーないーなそれいいなー

ばっちりばっちりそれいいな

いーないーなそれいいなー

気分も上を向く

付けるタイプの魔法だよ

自信を身につけて見える世界も変わるかな

同じ空がどう見えるかは

心の角度しだいだから

(つけまつける／きゅりーばみゅばみゅ 作詞・作曲 中田ヤスタカ)

これはある流行歌から歌詞を引用したものであるが、この歌詞の語り手は、女の子は「つけまつげ」をつけることで「自信を身につけて」「見える世界が変わる」ことを伝えている。そして「同じ空がどう見えるかは」「心の角度しだい」だと主張している。

外見が変われば自信がついて、自分自身の見える世界も、そして「心」も変わるといふ。しかし「心の角度」という限り、その「心」とは、あくまでも外側から見える類のものであろう。たとえば自分に自信がついて幸せ気分で空を見上げれば、どんよりした曇り空が力強く頼もしく見える。逆に自信を失い絶望的な気分で空を見上げると、高く青い空もからっぽで天井の抜けた無表情に見えてくる。そのような

られているかをわかりやすく説明した。参加学生はみなその説明に納得し、「死は恐ろしいものではなく、生の世界と地続きにあるものだ」ということに語り手が気づき、心に平穏が訪れた物語と結論づけられた。

その上で授業者である筆者は、一つの疑問を投げかけた。「語り手は本当にそれで死の恐怖を解消できたのか。鼠が死に瀕してもがく姿に語り手は「恐ろしさ」を感じ、「嫌な気持ち」を抱いているが、この気持ちはどこへ行ってしまったのか。」という問いである。語り手は実際、三年以上経った語りの現在において「自分は脊椎カリエスになるだけは助かった。」と記しているが、「だけ」とする限り、何かわだかまりが残っているのではないか。それはこの「恐ろしさ」と関係しないのか。という内容を含め、2週目に向けての課題として担当学生に示した。

担当学生は皆で話し合い、語り手の言動にはフロイトの「防衛機制」のとき、自分が目を背けたい現実から目をそらすための「合理化」作用が働いているのではないかと考察した。蝶々を石を投げる行為もその一つであるという。しかし語り手がなぜ「恐ろしさ」と向き合おうとしないのかという、彼が抱えている根源的な不安の問題にまで追るところまでは行きつかなかった。

### (3) 考察

そもそも筆者が要求した、語り手が鼠の時に感じた〈死に至る不安〉に関する言説が消えてしまったのはなぜかという、この問いかけそのものが学生にとってはあまりに抽象的で難しい内容だったのかもしれない。手がかりになるものは物語上の言説しかなく、実際ここに「答え」が書かれているわけでもない。後は彼らが「想像力」と経験から紡いでいくしかないだろう。これはまだ人生経験の浅い学生には確かにあまりにハードルが高い。ましてやここで語り手が抱えているのは〈死に至る不安〉という、20歳前後の若者であれば、もしかししたら想像すらしないような内容である。実感として語り手に共感できなければ、「想像力」すら働かないだろう。

そのように考えれば、これは筆者自身の教材選定の問題かもしれない。同じようなテーマで学生たちにとって身近に感じられる教材は

の部分を読み取る力が豊かに備わっている必要があると感じている。ところが実際はこれが難しい。言われたことを額面通りに受け取ってしまう。書かれていないことは想像すらしめない。その結果一面的な人間理解のまま、表面的なコミュニケーションに陥らざるを得ない。「城の崎にて」の語り手は、言説上はこの温泉へやって来て心が落ち着き「静かな」気持ちになる。そして蜂や鼠や蝶蝨の死に接して「生きていた事と死んでしまった事とは両極ではない」という思いに至り、この地を後にする。あたかも「死」への恐怖を拭い去り、安心して城崎を去ったようなもの言いであるが、ここで忘れてはならないのは、この語り手はどのような行動をしても事故からおよそ三年間は「死ぬかもしれない」という不安から抜けられなかったという現実だ。その気持ちに即して読むと、語り手の恐怖はいかなる気分転換をはかっても、いかに有効な治療を受けても、根源的に残り続けているものであり、その気持ちを抱えたまま、彼は物語の中に佇んでいることがよく読み取れるのではないか。物語られた言説ではなく、語り手の置かれた状況から読み取ってほしい。それは彼らの日常においても、そのような心がけで人と接してほしいというメッセージでもある。しかしそれは実際の授業では、困難を極めた。

## (2) 授業実践の概要

演習では、毎回担当の学生(3〜4名)を決め、彼らが主体となって授業を執り行う。各グループにつき2週を与え、1週目は彼らと与えられた作品について自由にテーマを決め、あらかじめ自分たちで用意した発問を参加学生に投げかけながら、当のテーマに迫るような仕掛けを作る。一方2週目に向けては、授業者である筆者が必要に応じて介入する。1週目でテーマに上手く迫れなかった場合は、1週目の終わりに何らかのヒントを出し、方向修正を迫る。筆者自身のテーマは作品の中から「隠された物語」<sup>ナラティブ</sup>を導き出すことであるが、「城の崎にて」では、先述の通り、語り手の言説にはあらわれない〈心の闇〉の部分に気づかせようと試みた。

1週目は、担当学生がいくつかの先行論文を引いた上での詳細なテキスト分析が示された。語り手が物語の最後に「生きていた事と死んでしまったこと」と、それは両極ではなかった」という心境に至るまでに、蜂、鼠、蝶蝨という生き物のモチーフがどう効果的に用い

## 3. 授業実践報告

## (1) 教材選定の意図

以上見てきたように、筆者は「城の崎にて」において、表面上の言説とはうらはらに、何か言葉にしえない思いを抱えて生きざるを得ない人物が描かれているというところに着目した。そしてその言説上にはあらわれない「隠された物語<sup>ナラテ</sup>」を、演習に参加する学生に読み取らせたいと考え、教材として取り上げた。

教育現場の中で日頃子どもたちと接してたびたび思うのは、彼らが語る会話の中に、語られた内容と本音の気持ちが上手く対応していないのではないかと思われるちぐはぐな言説が増えているという実感である。友人に言われた何気ない一言に傷つき、「もう顔も見られるのも嫌だ」と言っていた生徒が、その相手がいざ目の前に来るとまるで何ごともなかったかのように、嫌な顔一つせず平然と対応していたりする。みんなの前でふざけた軽妙な発言で笑わせた学生が、後にそれは「その場の空気を読んで発言した」、決して本音ではない内容だとわざわざ弁解しに来たりする。土井隆義は「現代の若者たちは、自分の対人レーダーが間違いなく作動しているかどうか、つねに確認しあいながら人間関係を営んでいる」のが特徴であり、「周囲の人間と衝突することは、彼らにとってきわめて異常な事態であり、相手から反感を買わないようにつねに心がけることが、学校での日々を生き抜く知恵として強く要求されている」という<sup>6</sup>。相手との衝突を極力避け、なるべく反感を買わないような言葉を選んで発することが第一義となり、発話者の本音は二義的なものになっているというところだろう。もしその傾向が確かならば、会話のやりとりの中で相手の本音を探ろうとしたら、聞く側は心してその「裏」を読まなければならぬということになる。人間関係において実に面倒な世の中であるが、ことは若者ばかりではない。社会全体の言説自体が「本音より建前」に満ちていることは確かだ。もっともこれは今に始まったことではない。土居健郎を引くまでもなく、いまや日本人の典型的思考パターンの一つになっているかもしれない。いずれにせよ日本社会に生きる私たちには、これまで以上に言説の裏側にある「本音」

(4) 語り手の現在

語り手は三年以上前の、この城崎での物語りを終えた後、今現在の心境として最後に「自分は脊椎カリエスになるだけは助かった」と述べている。このことから彼は、ようやく〈脊椎カリエスにかかって苦しんで死ぬ〉という恐怖からは逃れられたことがわかる。しかしそれは「だけ」という副助詞とともに語られており、そのことからすると、彼が今もなお同様の苦しみにさいなまれているであろうことは想像に難くない。実際に彼が今もなお何に怯え、何を恐れているのかについては、言説上どこにも語られておらず本当のところはわからない。しかし彼がもし城崎の体験で実存的に得たあの「生き物の淋しさ」の感覚が今もなお残っているのだとしたら、それは彼が電車の事故で感じた〈死の恐怖〉も〈死に至る苦しみ〉も、形を変えて残りうるものであること、それが生き物の宿命であるという、あの根源的な存在不安に今も苦しみ続けていることの表れなのではないだろうか。

苦しむ「恐ろしさ」の感覚が伴っていたが、蝶螈の場合、言説上ではそのような恐怖は感じられない。そしてその代わりに、この「不意な死」に対して「蝶螈の身に自分がなつてその心持を感じた」時、彼は「かわいそうに思うと同時に生き物の寂しさを一緒に感じ」ている。そして次のように物語は進んでいく。

自分は偶然に死ななかった。蝶螈は偶然に死んだ。自分は淋しい気持ちになって、漸く足元に見える路を温泉宿の方に帰って来た。遠く町端れの灯が見え出した。死んだ蜂はどうなったか。その後の雨でもう土の下に入ってしまったらう。あの鼠はどうしたらう。海へ流されて、今頃はその水ぶくれのした体を塵芥と一緒に海岸へでも打ちあげられている事だろう。そして死ななかった自分は今こうして歩いている。そう思った。自分はそれに対し、感謝しなければ済まぬような気もした。しかし実際喜びの感じは湧き上つては来なかった。生きている事と死んで了っている事と、それは両極ではなかった。それ程に差はないような気がした。

彼の感じる「生き物の淋しさ」は、自分の「淋しい気持ち」とつながっている。蜂も鼠も蝶螈もみな死んだが、自分は「偶然に」生き残っている。「偶然に」死んだ蝶螈は、もし自分の石が狙い通りに「蝶螈を驚かして水へ入れ」るだけだったならば、死なずに「死の苦しみ」を味わい続ける運命だったかもしれない。ところが蝶螈はその意図に反して「偶然に」死に、「静かな」死が訪れた。一方自分は「偶然に」死ななかったために今ここにいるが、その心境としては生に「感謝」する気も起こらず、「喜びの感じは湧き上がって」はこない。むしろこれから先、脊椎カリエスになって死ぬまで苦しむ運命を背負う可能性も残っている。どちらをとっても生き物に「淋しさ」はついて回るものなのだ。(生きていても死んでしまっても実存的に生き物は淋しいもの、それが彼の感じた「生き物の淋しさ」だとしたならば、この「生きていることと死んでしまっていることと、それは両極ではなかった」という気づきは、彼にとっておよそ「至福の状態」<sup>(4)</sup>とは言えないであろう。また他に具体的な屈託があつて心が晴れないというものでもない<sup>(5)</sup>。どこか人間における根源的な存在不安に通じるような、どこにも解決の向けどころのないような、実際に語り手が身体的に実感した「足の踏む感覚も視覚を離れて、如何にも不確かな心の状態にあるのではないだろうか。

(3) 「生きものの淋しさ」

ところがこの語り手には、次に出会った蟻蝮のエピソードによって、また別の感興が訪れる。そしてそのまま物語は終結し、この「嫌な気持ち」「恐ろしさ」の感覚は、言説上からきれいさっぱり消えてしまうのである。

「ある夕方」、いつもの散歩道でこの日語り手は「蟻蝮」と出会う。「蟻蝮」は語り手にとって「好きでも嫌いでもない」生き物であるが、「宿屋の流し水の出る所に集まっている」蟻蝮をよく眺めた経験から、「蟻蝮を見るとそれが想い浮ぶ」ために彼は「蟻蝮を見ることを嫌っている。そしてこの時彼はどういうわけか「蟻蝮を驚かして水へ入れよう」と思い立つ。「不器用だからだを振りながら歩く形が想われた」からという。このいたずらめいた行為の意味するものは何か。ここで彼は単なる思いつきでこの行動をしているのか。そうでなければその意味は何か。

筆者の見解としては、以下の通りである。彼にとって「蟻蝮」は、「宿屋の流し水」でもなく生きものである。水を求めて蟻蝮はここに集まってくるわけだが、「流し」に集まったが最後、それらはなかなか自分からは出られない。蟻蝮は集団で水を求めて流しに集まっているようにも見えるが、それは蟻蝮にとってはアリ地獄のような場所である。一度入ってしまったら最後、外に出たくても自分が力では出られない。そしてこれは、生きようと必死でもがいていたあの鼠の姿と重なる光景である。つまりここで語り手が蟻蝮にしようとした行為は、意識的にせよ無意識的にせよ、この生きものに対して「生きようと必死でもがく」「死の直前の苦しみ」の再現なのではないか。かつて箱根でよく見た蟻蝮の光景を語り手が嫌うのは、鼠と同様、死にたくなくてもがく姿を厭ったからであり、それをここで再び見ようとしているのである。

しかし思いがけず、彼が蟻蝮を苦しめようとして投げた石は、結果的に蟻蝮の「致命傷」となり、むしろあっけなく死んでしまう。そして自分の投げた石が「偶然」蟻蝮を殺してしまう結果となったこと。これが語り手の「妙な嫌な気」を引き起こす。

この「嫌な気」は、数日前に彼が鼠を見て感じた気持ちとどう関わりがあるだろうか。鼠の時に感じた「嫌な」気持ちには、死ぬ前に

れが本統なのだ」と思い、「自分が希っている静かさの前に、ああいう苦しみのある事は恐ろしい事」と考える。「死後の静寂に親しみを持つにしろ、死に到達するまでのああいう動騒は恐ろしい」と考え、「今自分にあの鼠のような事が起ったら自分はどうするだろう」として、あの電車で跳ねられた事故の後に自分がした行動を改めて振り返るのである。さらに彼はとっさの判断で自分で病院を決め、半分意識を失った状態にも関わらず、自分の指示で治療を受ける手はずを整える。「自分では不思議」なくらいに「死の恐怖に襲われなかった」が、事故によって負った傷が「フェータルな傷じゃない」とわかると、「亢奮から」「非常に快活」になった自分の姿を思い起こしている。

川で死に瀕している鼠が助かろうとしてもがくのは、「死の恐怖」からではない。その本能で生きようともがいている。語り手はその姿を見て、事故の時の自分と重ねる。あの時自分は確かに「死の恐怖」のないままに、いわば生きようともがいていた。それは鼠同様に本能のなせるわざだったのかもしれない。ところが今、自分は鼠が生きようと最期の悪あがきをしている姿を直視できない。その姿を目の当たりにして「嫌な気持ち」になり、死ぬ前に「ああいう苦しみのある事は恐ろしい」と実感している。

この鼠の姿を見た時に感じた、語り手の心情に思いを重ねてみる。語り手自身は、この鼠の姿を見て感じた「嫌な」感情を、その後一切言説上から排除してしまっているが、普通の感覚で考えたなら、ここで感じた〈死ぬまで苦しみ続ける〉ことに対する〈恐怖〉は簡単に消えるものではないだろう。そもそもこの語り手がこの温泉を訪れた目的は、背中の傷が脊椎カリエスととなって「致命傷」になることを恐れた、その「要心」のためであった。言い換えれば、彼はいまだ〈死に対する恐怖〉を拭いきれないまま、今ここに立っているということである。それがこの期に及んで自分の境遇と重なってしまうような鼠と出会い、改めて〈死ぬまで苦しみ続ける〉ことの恐ろしさを目の当たりにしてしまう。それはどんなに苦しいことだろうか。だからこそ彼は「嫌な」気持ちになったのであり、その不快感は、彼自身を抱えている現在の〈恐怖〉と結びつく、決して拭い去れない「恐ろしさ」なのではないだろうか。

という限り、その「感じたかった」思いは、語り手の中ですでに実感のともなわない気持ちとしてうやむやになってしまっていることになるが、彼は少なくとも一度は、自分が生かされたのは何かの意味があったと考えたいと思っていたということがわかる。しかしそれもここに滞在する中で「妙に自分の心は静まり、彼の気持ちのどこかに追いやられてしまう。そして語り手の心にはこの時、「何かしら死に対する親しみが起こっていた」として、かえって「死」に対する肯定的な気持ちが浮かんでいる。

そのような中で語り手はある日、「一疋の蜂が玄関の屋根で死んでいるのを見つけ」る。「忙しく立働いて」「如何にも生きている物という感じを与え」ている他の蜂とは対照的に「如何にも死んだものという感じを与える」この死んだ蜂を、彼は三日間、雨が降って死骸が流されてしまうまで、放置したまま眺め続けていた。彼にとってそれは「如何にも静かな感じを与え」「淋し」い姿に映った。そしてこの時語り手は「自分はその静かさに親しみを感じた」という。

物語上の言説をたどる限り、この時点で彼は自分が「死」というものを「静か」で「淋しい」ものにとらえ、その上でその「静かさ」に「親しみ」を感じている。ここに来る前に考えていた「自分にはしなければならない仕事がある」という「生への意欲」を感じたいという思いは気持ちの彼方に追いやられ、むしろ「死」は彼にとって「親しみを感じ」られるものとなっている。

(2) 「寂しい嫌な気持ち」

その後ほどなくして、彼はある日の散歩中、「首の所に七寸ばかりの魚串が刺し貫して」ある「大きな鼠」が、「川へなげ込」まれてい  
るのを見つける。鼠は「一生懸命泳いで逃げよう」としており、語り手はそれをたくさん見物人とともに見ている。鼠は必死で「石垣へはい上がる」とするが、なかなかそれが叶わない。語り手には「動作の表情に、それが一生懸命である事がよくわか」るが、首に刺さった魚串と見物人が面白がって投げる石にも邪魔されて、ただもがくばかりである。彼は「自分が鼠の最期を見る気が」せず、「鼠が殺されまいと、死ぬに極った運命を担いながら、全力を尽くして逃げ廻っている様子が妙に頭に」つき、「淋しい嫌な気持ち」になる。そして「あ

## 2. 志賀直哉「城の崎にて」教材解釈

## (1) 「死」という静かさに対する親しみ

先に示した通り、この作品の語り手は、自分が「山の手線の電車に跳飛ばされて怪我をした」その「後養生」のために、この「城崎温泉」に滞在した三週間について語っている。彼は「背中の傷」が「脊椎カリエス」になるかもしれないという漠たる不安を抱え、その「要心」のために「一人で」ここへたどり着いたという。ここへ来て「頭はまだ何だかはっきりしない」状態であるが、しかし「気分は近年になく静まって、落ち着きたい気持ち」になっている。「一人きりでだれも話し相手はな」く、「読むか書くか」「ぼんやりと」「山だの往來だのを見ている」か「散歩」をして暮らしている。散歩の際に「淋しい秋の山峡を小さい清い流れについていく時」に考えることは「やはり沈んだ事が多かった」が、その「淋しい考え」には「静かない気持ち」があった。彼は「よく怪我の事を考え」た。もしかしたら自分は一つ間違えば今ごろは、「青い冷たい堅い顔をして」「顔の傷も背中の傷もそのまま」で、「祖父や母の死骸がわきにあ」って「互いに何の交渉もなく」、「青山の土の下に仰向けになって寝ているところだった」などということが思い浮かんだが、「それは寂しいが、それほどには自分を恐怖させない考え」として彼の念頭にあったという。

これらの描写からわかることは、この城崎に来るまで、語り手はずっと落ち着かない気分でも過ごしていたこと、自分はこのけがが原因で若くして死ぬかもしれないということが頭をよぎるが、その気持ちもこの地に滞在して静かな気持ちで過ごしていると「それ程に自分を恐怖させない考え」になっているということ、つまりこの地に来たことによって彼の心には、自分の気持ちを平静に保つという意味でよい方向へ向かうベクトルが生まれているということである。

この地へ来る前は、中学の頃に読んだ『ロード・クライブ』という伝記に触発され、自分が「死ぬはずだったのを助かった」のは、「何が自分を殺さなかった、自分にはしなければならぬ仕事がある」というふうに「感じたかった」「気がし」ていたという。「気がした」

く自己沈潜している）、その（心の闇）である。作品の中の語り手は、物語言説上では、最終的に「生きていることと死んでしまっていること、それは両極ではなかった」という考えに至り、この滞在を経て何がしかの心境の変化を得たかのように描かれている。しかし彼はこのにより、彼が抱える「致命傷」の恐怖からは自由になれたのか。そしてこの滞在経験を三年後に書いている語り手自身はどうなのだろうか。

筆者は現在勤務校において大学生とともに、毎週さまざまな近現代文学教材を読む演習に取り組んでいる。テーマを「文学作品を通して対人関係の諸問題について考える」として、作品から対人関係上の諸問題を引き出し、参加者とともにその解決策を考えるとということを目論んでいるが、それは結果的に学生たち自身が登場人物の抱える心の問題と向き合う授業である。何かにつまずいている人の苦しみに向き合おうとすれば、必然的にその人の隠された心と向き合わなければならない。そしてそれはえてして表向きの言葉には表れない。いささか比喩的に言えば「言葉の裏側に貼りついている」ものである。

だからこそ授業者の私は、学生たちが授業を通して表面の物語には表れない「隠された物語」<sup>ナラティブ</sup>を発見できるような仕掛けを作ること、毎回自分に課している<sup>②</sup>。それによって彼らのものの見方考え方に広がりを持たせること、また「自分とは何者か」を問う盛り込みの「青年期」<sup>③</sup>にある学生たちにとって、彼ら自身の自己形成に直接働きかけるきっかけをつくることもその目的としてある。

「城の崎にて」は、そのようなねらいのもとで取り上げた教材の一つであるが、今年度扱った中では、学生たちにこの「隠された物語」を導くのに最も困難を要した作品となった。本稿では、その理由の考察も含め、文学作品を大学生と読むことの意味について考察していきたい。

まずはじめに、筆者の教材解釈を提示し、授業者の読みの方向性を明確にしたうえで、授業実践報告をふまえこの教育実践が持つ意味について考察したい。

## 1. はじめに

志賀直哉「城の崎にて」<sup>(1)</sup>には、「山の手線の電車に跳飛ばされて怪我をした」一人の男が、その「後養生」のために一人で「但馬の城崎温泉」で過ごした三週間の出来事が語られている。

背中の傷が脊椎カリエスになれば致命傷になりかねないが、そんな事はあるまいと医者に云われた。一三年で出なければ後は心配  
いらぬ、とにかく要心は肝心だからと言われて、それで来た。

語り手の今回の滞在の一番の目的は、事故で負った背中の傷の治療である。彼は、この傷が脊椎カリエスになることを心配している。医者には「そんなことはあるまい」と言われたにも関わらず、二、三年内に発症することもあるという少ない可能性の方を心配し、自分で決めてこの地に一人でやって来た。この描写から語り手自身はこの「致命傷」を必要以上にひどく恐れていること、そしてその不安を抱えたまま、しかも一人でこの地に滞在し続けていることがわかる。

彼が恐れている「脊椎カリエス」とは、結核菌が骨髄を侵し、死に至るまでひどく苦しむ病である。当時この病は特效薬がなく、ひとたびこの病にかかれば、死ぬまで苦しまなければならなかったという。つまり「脊椎カリエス」になるとは、自分が「死ぬまで苦しむ続ける」という事実をつきつけられることと同義だった。

「自分はいつか死ぬかもしれない」という不安を抱えて、たった一人で知らぬ地に滞在するということ。それはたとえば突然、死の不安にさいなまれて苦しくなっても、目の前にその思いを受け止めてくれる人は誰もいないということである。そのようなリスクを背負って、なぜ彼はこの「城崎」へ向かったのか。そして実際に何か得られたものはあったのか。

筆者がこの語り手と作品解釈上において向き合った時に一番気になるのは、彼の「死の不安を抱えながらそれを誰にも発信することな

〈論文〉

志賀直哉「城の崎にて」論——「私」の気分に封印された物語ナラティブ

——青年期教育において文学教材が果たす役割について考える②——

荒木奈美